

久留米城外郭遺跡

— 第 24 次発掘調査報告 —

Kurume-castle Sotoguruwa Site

— A Report of 24th Excavation —



延寶八年久留米市街図（1680 年）



安政二年改舊廓図（1855 年）

平成 29 年（2017）1 月
久留米市教育委員会

序

久留米市は古くから水路と陸路の要衝としての位置を占めてきました。市内には先人達の残した文化遺産が数多く存在しており、その究明が進められております。

今回の調査は、久留米城の外郭にあたる篠山町で実施しました。近世初頭の遺構を発見し、有馬氏が整備する以前の様子を垣間見ることができました。今回の発掘調査の成果を通して、久留米の歴史や文化財保護への理解に貢献することを願ってやみません。

なお、今回の発掘調査に際して、土地所有者の■■■■様をはじめ、近隣住民の皆様に多大なご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。

平成 29 年 1 月 31 日

久留米市教育委員会
教育長 堤 正 則

例 言

1. 本書は、併用住宅建設に先立ち平成 27 年度に■■■■氏の委託を受けて実施した、久留米城外郭遺跡第 24 次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は久留米市教育委員会が調査主体となり、市民文化部文化財保護課の西拓巳が担当した。
3. 遺構実測図の作成は、西と大石昇、塚本明美、森啓恵が行った。遺構実測図の浄書は、西と古賀和子が行った。なお、一部の図面の浄書にはデジタルトレースを用いた。
4. 遺物の実測は西が行い、拓本の作成と浄書は古賀が行った。
5. 遺構写真はマミヤ RB67 で、遺物写真はニコン D700 デジタルカメラで西が撮影した。
6. 図面の方位は座標北を示す。基準点の座標は、国土調査法第Ⅱ座標系（世界測地系）を用いた。
7. 遺構の略記号は、S A－柵列、S K－土坑、S P－ピット、S X・X－その他の遺構を意味する。
8. 土層の色調は『新版 標準土色帖』（日本色研事業株式会社、平成 9 年）に拠った。
9. 出土遺物・図面等諸記録は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管されている。
10. 本調査の略記号は L N G－024、調査番号は 201515 である。
11. 本書の執筆と編集は西が行った。
12. 表紙図版はいずれも絵図の一部である。また、赤丸は本調査地点の位置を示す。

本 文 目 次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の記録	4
IV. 総括	9

I. はじめに

1. 調査に至る経過

本調査は、併用住宅建設に伴う発掘調査である。平成 28 年 1 月 6 日、土地所有者の■■■■氏から、久留米市篠山町 253-2 外における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地であり、久留米城の一部である久留米城外郭遺跡の北端にあたる。対象地の東部は既に工事が着工されており、削平された地山の断面に遺構が観察できる状態であった。また、その後の確認調査でも遺構を確認したため、1 月 13 日に発掘調査が必要である旨を回答し、発掘調査終了まで工事を中断することになった。1 月 28 日、土地所有者から発掘調査の依頼が提出されたため、土地所有者と久留米市長檜原利則は、2 月 8 日付で久留米城外郭遺跡第 24 次調査の協定書と委託契約を取り交わした。なお、今回は併用住宅建設に伴う事前の発掘調査であるため、調査に関する費用は一部国庫補助を適用した。

現地での発掘調査は 2 月 25 日に着手し、3 月 11 日に終了した。遺物整理と報告書作成は、「久留米城外郭遺跡第 24 次調査発掘調査整理委託契約書」を締結した上で、平成 28 年 6 月 1 日から平成 29 年 1 月 31 日の間に行った。なお、対象面積は 310.89 m²であり、そのうち調査面積は 36 m²である。

なお、現地での発掘調査中には、大石昇氏（元久留米市教育委員会）から多大な協力とご教示を賜った。

2. 調査の体制（平成 28 年度）

調査主体：久留米市教育委員会

教 育 長：堤 正則

調査総括：久留米市 市民文化部

部 長：野田 秀樹

文化芸術担当部長：甲斐田忠之

次 長：竹村 政高

文化財保護課

課 長：馬場 博文

園井 正隆（平成 27 年度）

課長補佐：山崎万里子、白木 守

課長補佐兼主査：白木 守（平成 27 年度）

主 査：水原 道範

事務主査：豊福 早苗、塚本 映子

庶務担当：豊福 早苗

調査担当：西 拓巳

整理担当：古賀 和子、宮崎 彩香

発掘調査臨時職員（平成 27 年度）

大石 昇、蒲池 稔、合戸 喬一、塚本 明美、原口 貞子、平田 広之、森 啓恵

3. 調査の目的と経過

江戸時代の絵図によると、調査地点は小野家の屋敷を経て御郡方の役所となっている。今回の調査は近世の遺構を検出し、その変遷を把握することを目的に実施した。平成28年2月25日、約4×9mの調査区を設定し、翌26日に重機による表土剥ぎを行った。現地表面から40cmで整地層の上面に到達したが、攪乱が多い上に整地土によって遺構が判然としない状態であった。そこで、土坑などの遺構は、地山面まで掘り下げて確認した。表土剥ぎは午前中で終了し、午後から発掘調査臨時職員を投入して壁面清掃と遺構検出を行った。週休を挟んだ29日から遺構の掘り下げを始め、並行して測量や写真撮影などの記録作業を実施した。3月11日に高所作業車を用いて調査区全景を撮影した。撮影後、埋め戻しと器材撤収を経て、同日中に現地での発掘調査を終えた。

遺構配置図はトータルステーションを用いて作成し、測量データは株式会社CUBIC製の「遺構くん cubic」で編集、保存した。ただし、調査区壁面の土層のみ手測り（1/20）で記録した。記録写真は、モノクローム、カラーリバーサルともに6×7判で撮影した。

Ⅱ. 位置と環境

久留米市は筑紫平野の中央部に位置する。筑紫平野を流れる筑後川は、宝満川と合流して流れを南西へと変え、その左岸には低位段丘が形成される。久留米城外郭遺跡は低位段丘の西部に位置し、第24次調査地点は標高12.2mに立地する。

久留米城の築城は16世紀頃とされており、永正年間（1504～1520）に土豪が築いたという伝承が

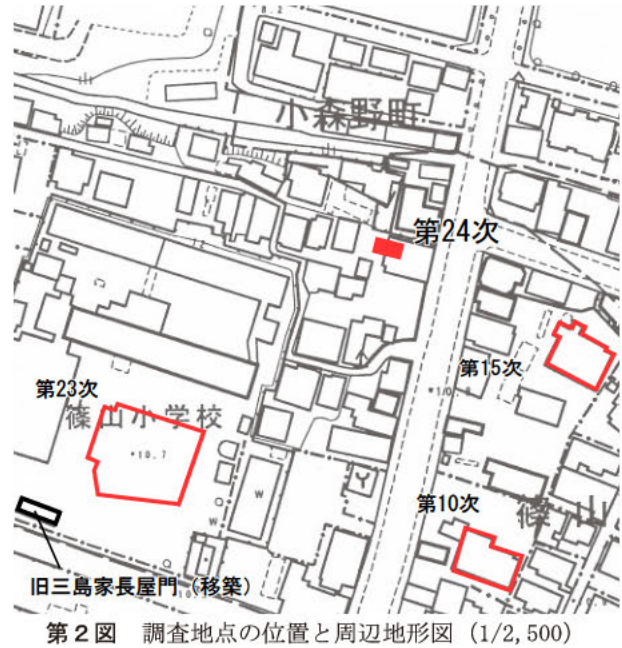


第1図 調査地点と周辺の遺跡分布図（1/25,000）

残るほか、天正 11 年（1583）に高良山座主良寛の弟麟圭が久留米城に籠ったという記録がある。

天正 15 年（1587）、豊臣秀吉の九州国割に伴い小早川秀包が久留米城に入城した。秀包はキリシタン教会を建てるなど城下の整備を行ったが、慶長 5 年（1600）の関ヶ原の戦いで西軍に属したために領地を没収された。翌 6 年（1601）、新たに田中吉政が筑後国に入国した。吉政は柳河城に入り、久留米城には嫡子の則政が入った。元和 6 年（1620）、二代忠政が無嫡子のまま死去して田中氏は改易となり、代わって有馬豊氏が筑後国北半に入った。豊氏は久留米城を改築すると共に、城下の整備に着手した。外郭は久留米城の本丸と二ノ丸、三ノ丸を囲むように築かれ、主に藩の役所や上級武士の屋敷が置かれた。

調査地点は、『延寶八年久留米市街図』（1680）では大目付や御奏者番を勤めた小野五郎右衛門の屋敷となっている。『廃家系譜』によると、五郎右衛門の子である竹右衛門が元禄 11 年（1698）に乱心自害して知行を召上げられている。その子である弥平太は、延享 3 年（1746）に御先手頭を勤めたが、無嫡子で死去したため断絶した。なお、傍系である五郎左衛門の家系は幕末まで続いている。『天保年間久留米城下図』（1830～1844）以降は、城下町を除いた藩領の行政を担当する御郡方の役所が置かれている。御郡方は、慶応 4 年（1868）5 月の水野正名による藩政改革で民政局に改組されており、調査地点も『明治六年筑後国久留米町図』（1873）では「旧民政局」となっている。



第2図 調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）

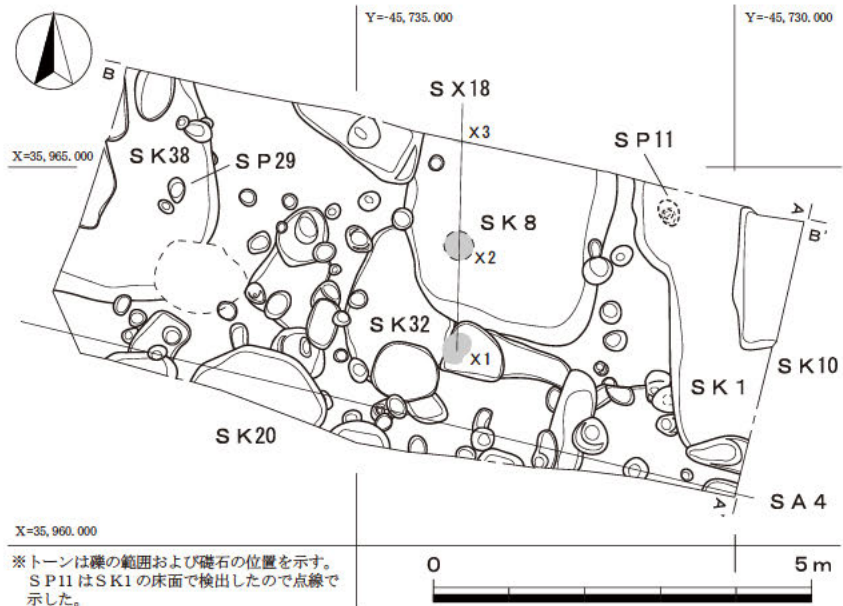


第3図 調査区全景（南西上空から）

Ⅲ. 調査の記録

1. 基本層序

調査地点は既に削平されており、特に対象地の東部約3分の1では現地表から2m以上削平されていた。調査区を設定した対象地の西部から中央部(第6図)は、地表下0.2~0.3を表土(1~3層)や既存建物のタタキ(4層)が覆い、その下に黄色系や橙色の土が積み重なる整地層(6~12層)があり、その直下では土坑(13~18層)やピット(20~22層)、礎石が観察できることから、生活面があったことが窺える。この遺構面の下にも、黄褐色土や灰色土などからなる整地層(23~30層)が観察できる。この整地層は複数の土坑を削平しており、整地層の直下に遺構の埋土が確認できる。そして、黄褐色の間層(55層)を一部挟み、現地表下0.60m、標高11.6mで地山面に達する。地山は、灰白色から明黄褐色の砂質土である。ただし、近代の溜枘があった調査区中央部では、灰白色に変色していた。



第4図 久留米城外郭遺跡第24次調査遺構配置図(1/100)

ト(20~22層)、礎石が観察できることから、生活面があったことが窺える。この遺構面の下にも、黄褐色土や灰色土などからなる整地層(23~30層)が観察できる。この整地層は複数の土坑を削平しており、整地層の直下に遺構の埋土が確認できる。そして、黄褐色の間層(55層)を一部挟み、現地表下0.60m、標高11.6mで地山面に達する。地山は、灰白色から明黄褐色の砂質土である。ただし、近代の溜枘があった調査区中央部では、灰白色に変色していた。

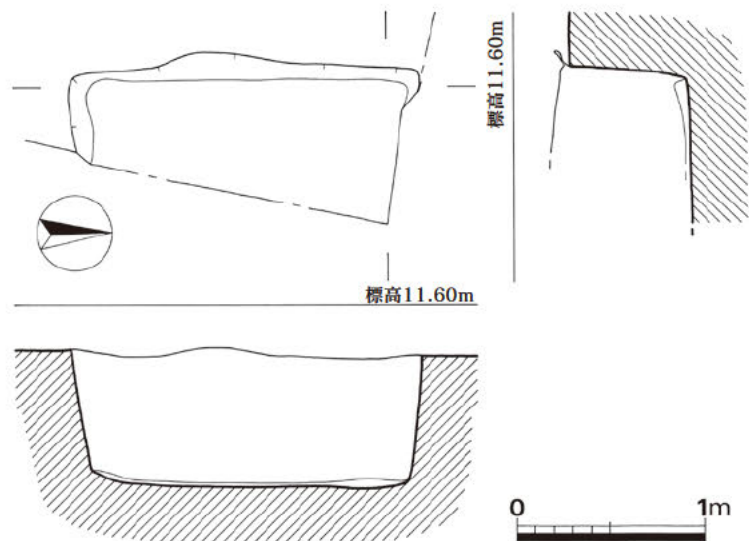
2. 検出遺構

今回の発掘調査では、中世の土坑2基、近世の柵列1条、土坑4基、建物基礎1基を検出した。以下、順を追って説明する。

中世の遺構

SK10(第5~7図)

調査区北東部で検出した土坑で、東側は調査区外に延びる。長軸1.88m、短軸0.84m以上の隅丸方形の平面を呈し、深さ0.78mを測る。埋土は、黄褐色系の土で占められ、比較的軟らかい印象を受けた。遺物は、土師器の土鍋片や須恵器の捏鉢、坏蓋の細片などが出土した。須恵器捏鉢の年代から、14世紀頃の土坑と考えられる。



第5図 SK10 実測図(1/40)

1. オリーブ褐色土 (瓦礫を多く含む) 表土
2. 暗灰色土+暗灰黄色土 (瓦を含む。砂質) 表土
3. 灰色土+灰白色土 (瓦を含む。砂質) 表土
4. 明黄褐色土 (灰色土+灰白色土) 旧建物のタタキか
5. 黄灰色土 (焼土粒・炭粒を含む)
6. 灰黄褐色土 (焼土粒・炭粒を含む)
7. 黄褐色土 (やや砂質。しまり固い)
8. 暗灰黄色土 (褐色・白色ブロック、炭粒を含む。しまり固い)
9. 橙色土 (黄褐色ブロックを含む。やや砂質。しまり固い)
10. オリーブ褐色土 (白色ブロック、焼土粒を含む。しまり弱い)

11. 灰色土 (炭粒を含む。やや砂質)
12. 淡黄色土 (褐色ブロックを多く含む。炭粒を含む。しまり固い)
13. 灰黄褐色土 (褐色ブロック、黒色間層を含む。砂質)
14. 浅黄色土 (焼土を含む。しまり固い)
15. 黄灰色土 (礫を含む。しまり弱い)
16. 黄褐色土 (土器片、炭粒を多く含む。しまり強い)
17. 暗灰黄色土 (黄色土、礫を含む)
18. 黄灰色土 (黄褐色ブロック、炭粒を多く含む)
19. にぶい黄褐色土 (焼土、礫、瓦片を含む。しまり固い)
20. 褐灰色土 (やや砂質。しまり弱い) ビット
21. 黄灰色土 (鉄分、土器片を含む。砂質) ビット
22. 黄褐色土 (焼土粒を含む。やや砂質) ビット
23. 灰色土 (白色ブロック、炭粒、瓦片を含む)
24. 黄褐色土 (灰色土、炭粒を含む)
25. 黄褐色土 (礫、焼土粒を含む。砂質。しまり固い)
26. 淡黄色土 (褐色ブロック、炭粒を含む。しまり固い)
27. 灰色土 (白色ブロック、鉄分、礫を含む)
28. 灰色土 (黄褐色・白色ブロック、炭粒を含む)
29. 灰色土+灰白色土 (鉄分を含む)
30. 灰色土 (白色ブロックを含む)
31. 灰色土 (白色ブロック、鉄分、礫を含む) SK 1
32. 灰白色土+灰色土 (礫、炭粒を含む) SK 1
33. 灰色土 (鉄分、炭粒、土器片を含む) SK 1
34. 灰色土 (淡黄色ブロック、鉄分、炭粒、土器片、瓦片を含む) SK 1
35. 淡黄色土+灰色土 (炭粒を含む) SK 1
36. 灰色土 (白色ブロック、瓦片を含む) SK 1
37. 明黄褐色土+灰色土 (鉄分を含む。やや砂質) SK 1

38. 灰色土+灰白色土 (炭粒を含む。しまり強い) SK 1
39. 灰色土+にぶい黄褐色土 (黄褐色ブロック、炭粒、礫を含む) SK 1
40. にぶい黄色土 (黄色ブロック、鉄分、炭粒を含む。しまり強い) ビット
41. 黄褐色土 (淡黄色土、白色ブロックを含む。しまり強い) SK 1
42. 明黄褐色土 (黄褐色ブロックを含む。しまり固い)
43. 灰色土 (黄褐色・白色ブロック、鉄分を含む) ビット
44. にぶい褐色土 (白色・褐色ブロックを含む) ビット
45. 灰色土 (黄色ブロック、炭粒を含む。やや砂質)
46. 灰色土 (礫を含む。砂質)
47. 黄灰色土 (白色・褐色ブロック、炭粒を含む)
48. 灰白色土+灰色土
49. 灰色土 (褐色ブロック、炭粒を含む)
50. 灰白色土+灰色土
51. 灰褐色土 (白色ブロック、炭粒、土器片を含む) SK 8
52. 灰色土+明褐色土 (白色ブロック、炭粒、土器片を含む) SK 8
53. 明褐色土 (白色ブロックを含む) ビット
54. 灰色土 (明褐色ブロック、鉄分を含む。しまり強い) SK 38
55. 黄褐色土 (灰色・黄褐色ブロック、鉄分を含む)
56. 黄褐色土 (炭粒、鉄分、礫を含む) SK 10
57. 暗灰黄色土 (土器片を含む) SK 10
58. 明黄褐色土+黄褐色土 (黄褐色土を含む)
59. にぶい黄色土+淡黄色土 (黄褐色土を含む) SK 10
60. にぶい黄色土 (黄褐色・淡褐色ブロックを含む) SK 10



第6図 調査区東壁・北壁土層図 (1/40)

SK32 (第3～4図)

調査区中央部で検出した土坑で、SK8やピットに切られる。平面は楕円形を呈すとみられ、長軸2.09m、短軸1.44m、深さ0.14mを測る。埋土は褐色土を含む灰色土で、土師器坏の細片や瓦質土器の瓶底部、丸瓦が出土した。丸瓦は布目が古代の瓦よりも細かく、中世瓦の特徴を有している。また、近世の遺構に削平されることから、土坑の年代も中世と想定できる。



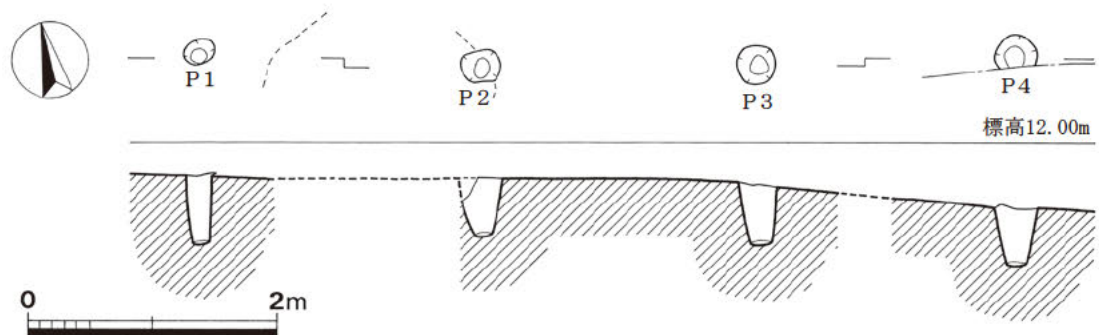
第7図 SK10 完掘状況 (東から)

近世の遺構

柵列

SA4 (第3・8図)

調査区南部で検出した柵列で、4基のピットがN-76°-W方向に並ぶ。P3はSK20に削平される。柱穴は、円形や小判形の平面を呈し、直径0.18～0.34m、深さ0.47～0.54mを測る。埋土は、いずれも炭粒や焼土粒、礫を含む灰色土であった。掘方が類似しており埋土が同一であることや、約2.2m間隔で並ぶことから、柵列と判断した。遺物は、P1から土師器細片が2点出土したほか、P3の床面で柱痕とみられる木片が出土したのみである。具体的な年代は不明だが、江戸時代の町割を踏襲した現在の区画割に並行することから、近世の柵列と推定される。



第8図 SA4 実測図 (1/60)

土坑

SK1 (第3～4・6図)

調査区東端で検出した土坑である。遺構の大半は調査区外へと延び、複数のピットが後出する。長軸3.78m以上、短軸2.23m以上を測り、深さは最大で0.34mを測る。埋土は、黄褐色土や灰色土が大半を占め、白色ブロックや炭粒、鉄分を含む。遺物は、明染付などの陶磁器や、土師器の土鍋片、瓦の細片が出土した。明染付や唐津系の小皿の年代から、16世紀後半から17世紀初頭に埋没したとみられ、16世紀の可能性もあるが、近世の土坑と判断した。

SK8 (第6・9図)

調査区中央部北側で検出した、隅丸方形の平面を有する土坑である。遺構の北側は調査区外へ延び、SK1や複数のピットが後出する。長軸2.70m以上、短軸2.41m、深さ0.19mを測る。埋土

は灰色～明褐色の土で、白色ブロックや炭粒、土師器片を含む。遺物は、土師器土鍋の口縁片や明染付、天目碗、唐津系の大皿片などの陶磁器、弥生土器の甕片、砥石、炭化材などが出土した。陶磁器の年代から、16世紀後半から17世紀初頭の土坑と考えられる。

SK20（第3・4図）

調査区南西部で検出した土坑で、SA4や複数のピットに後出する。土坑の南部は調査区外に延びるが、平面は楕円形を呈すとみられ、長軸1.81m、短軸0.74m以上、深さ0.15mを測る。埋土は暗褐色土と灰色土が混ざり、炭粒と焼土粒を含む。遺物は、土師器の細片2点のほか、瓦質土器の細片、棧瓦の破片、寛永通寶が各1点出土した。寛永通寶は、いわゆる文銭である。棧瓦などから18世紀以降の埋没が推定されるが、他の遺物に乏しく、土坑の明確な時期は断言できない。

SK38（第4・6・10～11図）

調査区北西隅で検出した土坑で、複数のピットが後出する上に、遺構の北部・西部は調査区外に延びる。楕円形の平面を呈すとみられ、長軸3.06m以上、短軸2.35m以上、深さ0.21mを測る。埋土は褐色土や焼土粒を含む灰色土で、土師器の播鉢や陶器碗、平瓦が出土した。天目碗の年代から、16世紀末から17世紀初頭の土坑と考えられる。

建物基礎

SX18（第4・12図）

調査区中央部で検出した遺構で、N-2°-E方向に丸石や板石を詰めたピット2基と礎石1個が並ぶ。北側のピットX2は表土剥ぎ時にのみ確認したが、標高が南側のピットX1や礎石X3と同じであり、これらと等間隔に位置することから、同一の遺構と判断した。ただし、X3が調査区外に延びる別遺構である可能性は残る。X1の掘方は、長軸0.81m、短軸0.70m、深さ0.12mを測る。埋土は褐色土を含む灰色土で、遺物は土師器の細片が6点出土したのみである。出土遺物に乏しいが、石を



第9図 SK8完掘状況（南西から）



第10図 SK38完掘状況（南西から）



第11図 SK38遺物出土状況（東から）

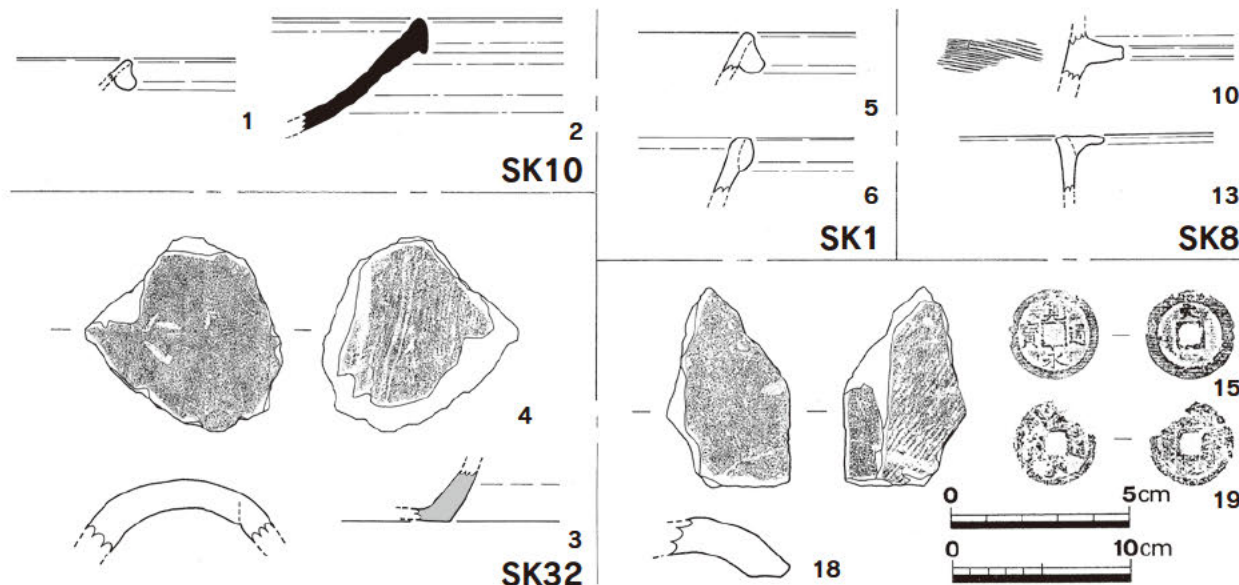


第12図 SX18X1礎検出状況（南から）

詰めた基礎の構造から、遺構の年代は19世紀後半以降と考えられる。

3. 出土遺物 (第13～14図、第1表)

合計でパンコンテナ1箱分の遺物が出土した。ごくわずかな弥生土器の甕口縁部や、古代から15世紀の土師器や須恵器、瓦質土器を除けば、16世紀から近世の土師器や陶磁器、瓦が大半を占める。個々の法量や調整、年代などの詳細については、出土遺物観察表を参照願いたい。



第13図 出土遺物実測図 (銭貨は1/2、その他の遺物は1/4)

第1表 出土遺物観察表

遺物No.	出土遺構	種別	器種	法量(cm)			染付 釉薬 色調	装飾・調整			底面・高台 内印銘等	特徴	胎土・製作地 石材・重量	年代・備考	登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)		外面	内面	見込み					
1 第13・14図	SK10	土師器	土鍋	-	-	(1.8)	橙色	磨耗 黒変	磨耗	-	-	被熱著しい	精良(石英・長石・ 赤色粒子)	口縁部のみ 14～15世紀中頃	201515 000024
2 第13・14図	SK10	須恵器	捏鉢	-	-	(1.8)	灰色	回転ナデ	回転ナデ	-	-		精良	口縁部のみ 14世紀前半	201515 000025
3 第13・14図	SK32	瓦質土器	瓶	-	-	(2.9)	灰色	回転ナデ	回転ナデ	ナデ消し	当具痕か	外面やや 磨滅	精良(雲母)		201515 000033
4 第13図	SK32	古瓦	丸瓦	(10.4)	(10.4)	(4.0)	灰黄色	ナデ消し	布目・縦紐 粘土接合痕	-	-		精良	中世か	201515 000034
5 第13・14図	SK1	土師器	土鍋	-	-	(2.25)	灰褐色	回転ナデ	回転ナデ	-	-		精良(石英・長石・ 雲母)	口縁部のみ 16世紀	201515 000007
6 第13・14図	SK1	土師器	土鍋	-	-	(3.1)	にぶい 橙色	回転ナデ 被熱	回転ナデ	-	-	玉縁口縁	精良(雲母・ 赤色粒子)	口縁部のみ	201515 000006
7 第14図	SK1	土師器	摺鉢	-	-	(2.8)	灰白色	回転ナデ	カキ目 描目	-	-		精良(雲母)	16世紀	201515 000002
8 第14図	SK1	磁器	小皿	-	[8.8]	(1.9)	染付	圏線		圏線・孔雀 か	放射状の ケズリ痕	明染付	白色精良 黒色粒子	B2群か 16世紀後半	201515 000004
9 第14図	SK1	陶器	小皿	-	-	(6.1)	灰釉	一部露胎		窯体・スス 付着	露胎		灰黄色精良 唐津系	底部のみ 1580～1610年代	201515 000001
10 第13・14図	SK8	土師器	羽釜	-	-	(2.9)	にぶい 黄橙色	回転ナデ 刷毛目	刷毛目 (横方向)	-	-	外面下部 スス著しい	精良(微砂粒・ 雲母)	最大径[27.6]cm 16世紀	201515 000015
11 第14図	SK8	磁器	碗	-	4.7	(2.5)	染付	圏線		圏線・鳳凰	量付露胎	明染付	灰白色精良 黒色粒子	底部のみ 16世紀後半	201515 000017
12 第14図	SK8	陶器	碗	-	3.0～ 3.1	(2.0)	黒釉	露胎 軸垂れる			削り出し高台 軸貼りつく	天目	灰白色精良	底部のみ 1594～1610年代	201515 000014
13 第13図	SK8	弥生土器	甕	-	-	(2.3)	灰白色	磨耗	磨耗	-	-	橙色	精良(石英・ 角閃石・雲母)	口縁部のみ 中期	201515 000016
14 第14図	SK8	石製品	砥石	(10.0)	3.2	3.2	橙色	研磨痕		-	-		凝灰岩 (149.6)g	撥形	201515 000019
15 第13図	SK20	銅製品	銭貨	2.5 (直径)		0.1	-	「寛永通寶」		-	-	緑青吹く	2.25 g	新寛永(文銭)	201515 000046
16 第14図	SK38	土師器	摺鉢	-	-	(2.8)	灰白色	回転ナデ	カキ目 描目	-	-		精良(雲母)	16世紀	201515 000037
17 第14図	SK38	陶器	碗	11.2	3.4	5.6～ 5.7	黒釉 褐色釉	一部露胎			露胎 鉄分付着	天目	灰白色精良	1594～1610年代	201515 000036
18 第13図	SP11	古瓦	丸瓦	(11.1)	(6.8)	1.3	灰黄 褐色	ナデ消し	コビキ痕 磨耗	-	-	面取り	精良(長石・雲母・ 赤色粒子)	16世紀	201515 000026
19 第13図	SP29	銅製品	銭貨	2.3 (直径)		0.1	-	「洪武通寶」		-	-	緑青吹く	(1.95) g		201515 000048

【凡例】〔 〕は復元値を、()は残存値を、-は欠損または該当部位が無いことを示す。明染付の分類は、以下の文献に拠った。

小野正敏「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」 日本貿易陶磁研究会『貿易陶磁研究』第2号 昭和57年



第 14 図 出土遺物写真

IV. 総 括

古相の遺構として、中世の土坑 S K10・32 がある。第 24 次調査地点の南東側に位置する第 15 次調査地点では、東播系須恵器や同安窯系青磁の皿が出土しており（注1）、中世の遺構の広がりが見定される。次いで、S K1・8・28 といった、16 世紀末～17 世紀初頭の遺構が見られる。調査地点周辺は、田中氏の治世に内町と称する城下町があったと推定されており（注2）、出土した明染付や天目碗からは、有馬氏が整備するよりも前の城下町の存在が窺える。17 世紀中頃以降の遺構として S K20 が挙げられるが、具体的な年代は不明である。19 世紀後半の遺構である S X18 は、御郡方や民政局に関する遺構と考えられる。

（注1）久留米市教育委員会『久留米城外郭遺跡 - 第 15 次発掘調査報告-』久留米市文化財調査報告書第 298 集 平成 22 年

（注2）久留米市教育委員会『三本松町遺跡』久留米市文化財調査報告書第 74 集 平成 4 年

報 告 書 抄 録

ふりがな	くるめじょうそとぐるわいせき　－だい24じはつくつちょうさほうこく－							
書名	久留米城外郭遺跡　　　　　　　　　－第24次発掘調査報告－							
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第374集							
編著者名	西　拓巳							
編集機関	久留米市　市民文化部　文化財保護課							
所在地	〒830-8520　福岡県久留米市城南町15番地3　　Tel 0942-30-9225　　Fax 0942-30-9714 E-mail : bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp							
発行年月日	2017（平成29）年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
くるめじょう 久留米城 そとくるわいせき 外郭遺跡 第24次調査	福岡県 久留米市 篠山町 253－2外	40203	031165	33° 19′ 23″	130° 30′ 31″	20160225 ～ 20160311	36㎡	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
久留米城 外郭遺跡 第24次調査	集落	中世 近世	土坑 柵列 土坑 建物基礎	2基 1条 4基 1基	近世陶磁器、土師器、 須恵器、瓦、金属製品		16世紀後半～ 17世紀初頭の 土坑を検出。	
要　　約								
調査地点は筑後川左岸の低位段丘上に位置し、有馬豊氏が整備した久留米城の「外郭」にあたる。主な遺構として、中世の土坑と16世紀後半から17世紀初頭の土坑を検出した。調査地点周辺は、慶長6年（1601）に筑後国に入国した田中吉政の代に、内町と称する城下町があったと推定されており、検出した土坑は、有馬氏が整備する以前の城下町の様相を示していると考えられる。								
土木工事の届出日		平成28年1月25日			遺物の発見通知日		平成28年3月15日 （27文財第1651号）	

久留米城外郭遺跡

— 第24次発掘調査報告 —

久留米市文化財調査報告書 第374集

平成29年1月31日

発行 久留米市教育委員会

編集 久留米市 市民文化部 文化財保護課

印刷 ミフチ印刷紙器有限会社

久留米市上津2-2-5